

# 南中村「おうむ石」(鸚鵡石)

度会町指定文化財 (名勝)

指定日 平成30年10月23日

昔、山仕事の人たちがひと休みしていると、岩の中から話し声が聞こえてくるので大変驚き、山霊(山の精)のしわざだと恐れて逃げ帰ったと言い伝えられています。やがて音や声が岩によく反響することがわかり、鸚鵡のような岩として徐々に評判になっていきました。

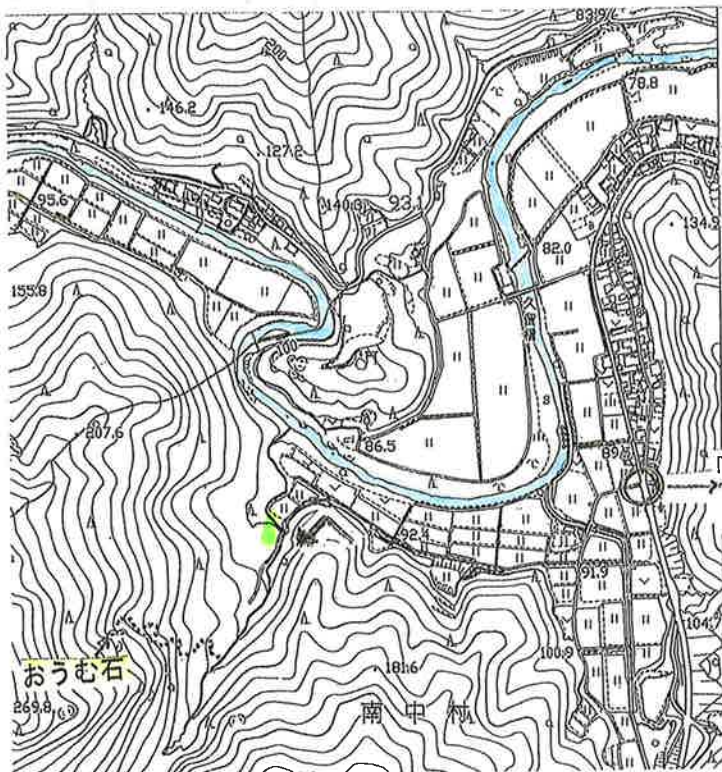
江戸時代の正徳5年(1715年)、芭蕉の門人露川や燕説らが南中村の「おうむ石」を見物し、一之瀬の俳句愛好者たちと交流しました。享保15年(1730年)には、当代随一の学者であった伊藤東涯が南中村を訪れて「おうむ石」の詩を詠み、『勢遊志』を著しています。

東涯の詩は靈元上皇の知られるところとなり、画工の山本宗仙にその情景を屏風に描かせました。東涯がその序文を書いています。また、大阪の浄瑠璃作家竹田出雲の浄瑠璃が演じられ、南中村「おうむ石」が広く世に知られるようになりました。

その後も名所として、斎藤拙堂(津藩の学者)、伊勢俳諧の麥林舎乙由をはじめ文人墨客など多くの人を訪れております。

この巨岩は、高さ18m、幅40m余で、「チャート」と呼ばれる石英質堆積岩です。

反響面は垂直で、真北を向いています。



馬車可